

協会活動報告

「さくらサイエンスプラン」による

湖南大学設計芸術学院訪日団を迎えて

1. 湖南大学について

湖南大学のある長沙市(省都)は長江や洞庭湖の南岸に位置する湖南省の中心地。大学の歴史は古く、中国四大書院の1つとして976年の北宋時代に設けられた岳麓書院を淵源にもつ、中国で一番歴史のある大学である。

同書院は記録によると、北宋の開宝9年(西暦973年)に潭州の太守朱洞が岳麓山の麓に書院を建設し、当時は講堂5軒及び教室等52軒とある。北宋の大中祥符8年(1015年)に宋の真宗が書院の院長に周式を招き同時に額を下賜してから書院の名前が世間に広まった。南宋乾道元年(1165年)に安

撫使の劉洪が旧地に書院を再建し、現在の体制を有するようになる。それから朱熹が福建から訪れ、講義を行う。紹興5年に至って朱熹が湖南の安撫使となって出仕してきて、書院をさらに建設し、規則

制度(表紙裏「学規」参照)を一新した。そして、その間、陽明学や明の実学においても本書院は活動した。

清代に入っては建築より、風景など自然環境の整備に重点を置き、清代最後の大規模改修は同治7

年(1868年)実施され、ここで書院の最後の形が出来上がったといえる。

民国元年(1917年)に湖南工業専門学校に改名されたが、ここ麓山の麓に工業教育の基盤が建設されることとなった。1926年2月1日に省立湖南大学(1937年に国立に改める)となり、ここに湖南大学が人民



矢野会長挨拶

共和国になって機械工業部(現在は省立となる)に所属することとなる原点がある。現在も岳麓書院は湖南大学のキャンパス内に往時の建物の一部が残されており、研究者に供されている。

2. 湖南大学設計芸術学院との交流

今回、湖南大学の設計芸術学院の教員・学生を「さくらサイエンスプラン」により、招へいするには、若干の説明を要する。30年ほど前になるが、筆者(当協会顧問)がJICA北京事務所に駐在していた1980年代に、湖南大学設計芸術学院の修士課程が創設されたが、それには千葉大吉岡教授が現地、長沙に出張し立上げの協力をしている。筆者もJICA側から資材供与の提供を行うため北京から現地に入り協力した経緯がある。84年、吉岡教授が帰国時に植樹された記念樹「含笑」は現在、30年以上を経過し、大きく育っている。しかし、吉岡教授は帰国後数年にして亡くなられた。

3. 湖南大学設計芸術学院 訪日団を迎えて

受け入れ人数は11名、受け入れ期間は2017年2月12日～2月18日の7日間、研修交流先はすでに述べた友好交流協定のあ

る千葉大学工学部と筑波大学芸術群及び千葉大学と関係の深い千葉工業大学、その他、工業デザイン関連の展示館としてGKグループ展示館（新宿）、千葉工業大学の展示館（スカイツリー隣接）を訪問した。ここでいうGKグループは日本の工業設計の先人達が立ち上げた工業設計企業であり、

多くの日本の大企業もここに製品設計を委託して数多くの歴史的製品を残した。キッチンマンの醤油さし、ホンダの自動車等がある。本分野では中国はいまだ日本に比べ、遅れており、今回の訪問でも、日本の大学では過去の製品設計の技術基盤や手法の大きな武器となつたCAD等を

超えて、心理的手法にも及んでいることがわかった。

人間の心理的動向がその行動に与える影響を考慮し、それを反映した安全、癒しの製品設計に取り組んでいる。つまり、人間行動学と工業設計の関係を追求している。

今回の日程編成においては大学側の都合を優先したため、全体のバランスは必ずしも理想的ではないかもしれない。

第1日目の13日午前は銀座のソニー及びニッサンの商品展示館、午後は千葉工業大学の展示館（押上）を見学したが好評であった。

第2日目の14日に訪れた筑波大学では体育芸術区域にある工業設計棟で山中主任教授の説明の後、学生は待機していた日本人学生とともに博士過程の学生の指導のもとゲーム様式の活動をし、人間のゲーム的活動の中から問題解決の端緒を見つける

訓練を体験した。教師4名と同行者はこの間、山中教授の研究室において、最近の筑波大学の工業設計の動向について講義を伺った。それはむしろ美術と工業設計との融合である。その後、学生の作業室を見学した。

第3日目の15日は千葉工業大学において交流会があった。校舎はJR津田沼駅の真ん前、出迎えを受けて工業設計棟に入り、最新の設備の実験室、製品展示



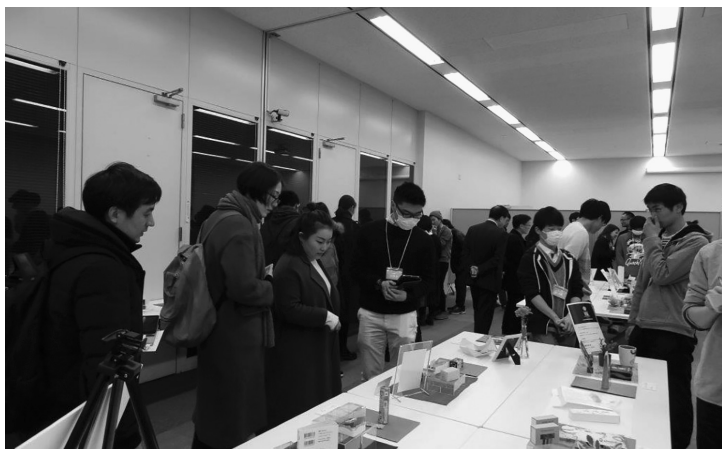
羽田空港にて



筑波大学を見学

室の後、丁度学内で開催されていた工業デザイン科1、2年生の作品展示室で日本人学生と湖南大学の学生との交流が行われた。湖南大学の学生にとっては良い刺激となったようである。教室では長尾教授の説明を受けた。

第4日目、16日は国際善隣協



千葉工業大学を見学

会における交流会と昼食会、その後、汐留から、両国の江戸東京博物館に向かった。そこでは江戸から東京への文化の変遷を見学し、日本に対する理解の一助となった。

第5日目、16日は千葉大学に向かった。JR西千葉駅前の正門から、案内を受けて工業設計棟に入り、ここでは渡辺副学長の歓迎の言葉、植田教授の説明、さらに自動車工場におけるデザイン部長の経験を有する教授から、自動車デザインの全過程についてパワーポイントを使って説明され、

その後、若手講師から現在の研究対象として、人間の行動学を研究し、それを製品の安全性に組み込むことを考えており、湖南大学の学生と活発な意見交換があった。ここでは人間の心理、行動様式を製品設計に如何に反映させるかがテーマとなりつつある。こうした最近の日本



千葉大学を見学

新たな繋ぎができたことは非常に喜ばしいことである。

今回の一連の交流において3校を訪問交流したが、いずれの学校も大変な歓迎を示された。中には学校を辞する際、学校側から再び湖南大学と繋いで頂いて有難うございますとお礼を述べられた。一方、湖南大学側は、今回の訪問の話を聞き、当時から大学に保存されていた30年前の資料を見て、改めて関係大学間の絆を発見したことの意義に思い至ったと述べていた。今回30

の大学の工業設計の一端を理解できたことに大いに満足していた。

4. 今回の交流事業について

今回の交流事業は30年前の日本の吉岡教授の訪中に端を発した。30年以上も前の事象から、

年を隔てた交流であったが、それが再度繋ぐことができたわけであるが、この30年という時間が重要だと思う。この時間で有れば、即ち30年で有れば当時関係した若き学徒が現役に留まっている可能性があるのである。

(八島継男)